

学際研究の経緯と今後のあり方

井口雅一* 稲村 博** 越 正毅*

新谷洋二* 宮川 洋* 森地 茂***

当学会は昭和49年9月に発足し、今日まで学際研究を軸に、さまざまな活動を展開してきた。ここでは、これら諸活動の中心をなす研究調査、国内・国際シンポジウムの流れをたどる中で、学際研究がどのように具体化され、定着していったのか、その過程で生じた問題点を明らかにしつつ、今後の学際研究のあり方を展望した。

The History of IATSS Interdisciplinary Research and Its Prospect

Masakazu IGUCHI* Hiroshi INAMURA** MASAKI KOSHI*

Yoji NIITANI* Hiroshi MIYAKAWA* Shigeru MORICHI***

IATSS was inaugurated in September, 1974 and it has been showing the various activities based on interdisciplinary research. Reflecting upon the main activities of IATSS such as research surveys and domestic and international symposia, over the past years, we here discussed how the interdisciplinary research has been conducted and fixed. We also clarified the problems which have come out through the process of the interdisciplinary research and what it should be hereafter.

1. シンポジウムと研究プロジェクトの流れ

新谷(司会) 国際交通安全学会は学際研究を標榜して設立され、今年で9年目となり、来年は10周年を迎えます。そこで本日は、この学際研究が、これまでの当学会の研究プロジェクト活動、シンポジウム活動の中でどのように位置づけられてきたかを、まず考えてみたいと思います。そして次に、学際研究とはどうあるべきかを含めた、今後の研究プロジェクト活動のあり方などを話し合っていきたいと思います。初めに、当学会の設立以来の会員であり、さまざまな研究プロジェクトやシンポジウムに関与されてきた2人の方、現在は当学会の研究調査部会の委員長である宮川さんと、国内シンポジウムの委員長である越さんから、これまでの研究活動の流れや問題点などについて報告をお願いします。次に、一昨年当学会の会員になった稲村、森地、井口の3人の方から、新会員としてのフレッシュな目で、当

会の学際研究について気がついたことや疑問点などを出していただき、その後に討論を行っていきたいと思います。

宮川 私の専門は電気通信で、交通そのものではありませんが、この学会の非常に学際的雰囲気とでもいうものが、他の学会にはない独特のものがあつたことと、専門の電気通信がひとつの曲り角に来ているという認識があつて、学際的な問題意識が自分自身の研究にも役立っているということで、この学会に加えていただいているわけです。

そこで、私はシンポジウムの流れを学際研究の面からお話しします。シンポジウムには外国の研究者なども参加する国際シンポジウムと、国内の関係者だけによる国内シンポジウムの2つがあります。国内シンポジウムの第1回は昭和50年4月で、第2回が同じ年の9月、第3回が翌年6月と続き、テーマはいずれも「日本人と交通」でした (Table 1)。この時期は、日本人と交通のかかわり合いを議論する中で、異分野の人々が一緒になって、どのように学際研究を進めていくべきか、さらには、そもそも学際研究とは何かを追求した模索の時代だったと思います。そして、51年10月に開かれた第1回 DISCOVERIES 国際シンポジウム「人間の知恵と交通」も、この模索を国際的に広げ、科学技術と社会のか

* 東京大学教授 (本学会員)
Professor, University of Tokyo

** 筑波大学助教授 (本学会員)
Associate Professor, Tsukuba University

*** 東京工業大学助教授 (本学会員)
Associate Professor,
Tokyo Institute of Technology
昭和58年5月30日実施



宮川 洋氏

かわり合いを学際的に議論することを主要な狙いとしたわけです。

こうした学際論議を経て、52年あたりからは具体的に何を取り上げ、やっていくべきかという実践の時代へと入っていったと思います。53年は国内、国際とも「人とモビリティ」をテーマにして、人の社会生活の根源的な営みである交通を、モビリティ＝移動という形でとらえ、従来の交通関連の専門分野の縦割りのイメージを超えた共通したイメージのもとで、一定の問題提起を試みたものです。54年からは国内、国際を1年おきに開催することとなり、その年の9月、第6回国内シンポジウムが初めて東京を離れ、京都で開かれました。翌55年9月の国際シンポジウム「高速社会と人間」は、「人とモビリティ」のテーマをさらに発展させ、スピードと社会のかかわり合いを、そのプラス面、マイナス面といったことから追求したのが特色だったと思います。この問題意識はさらに、57年9月の国際シンポジウム「人と空間」へと引き継がれ、モビリティをスピードの面から考えた前回に対して、空間ないしは密度の面から、人間と交通の関係を考えてみようとしたわけです。

この53年、55年、57年の3つの国際シンポジウムの時期は、学際研究が模索を経て徐々に定着してい



新谷洋二氏

Table 1 シンポジウムの流れ
The history of IATSS symposia

開催年月	国内シンポジウム・テーマ	国際シンポジウム・テーマ
1975年4月	第1回「日本人と交通」	
1975.9	第2回「日本人と交通」	
1976.6	第3回「日本人と交通」	
1976.10		DISCOVERIES「人間の知恵と交通」
1977.9	第4回「交通をめぐるジレンマ」	
1978.4	第5回「人とモビリティ」	
1978.9		第2回「人とモビリティ」
1979.9	第6回「明日の交通社会の姿を求めて」	
1980.9		第3回「高速社会と人間」
1981.9	第7回「交通と通信」	
1982.9		第4回「人と空間」
1983.5	第8回「交通の安全を考える」	

き、さらに軌道に乗ってきた時代、比較的スムーズに動いている時代に移ってきたといえます。しかし、これはまた、これまでの学際研究を問い直す時期に入ったことを意味しているわけで、そのひとつの試みが、去る5月の第8回国内シンポジウム「交通の安全を考える」だったのではないかと思います。

新谷 続いて、越さんから主に研究調査部会の流れと問題点についての報告とともに、今のシンポジウムの報告に補足がありましたらお願いします。

越 私は最近の国内シンポジウムと月例懇談会の世話役になっていまして、そうした段取りをする立場から見ると、学際研究には2つの面があるように思います。ひとつは、ひとつの専門分野だけでは扱えないような問題を異分野の人々と扱うと深みが出るというか、間口、奥行ともに広がるという利点があります。しかし、半面においてテーマを選んだり、スピーカーをお願いするときは、ある特定分野の人は非常に詳しいが、他分野の人はあまり詳しくない、あるいはある分野の人は関心をもつが、他分野の人はあまり関心もちそうもないといったテーマは、意識的に避けてしまうということが一方であります。

これは国内、国際シンポジウムのこれまでのテーマを見てもいえることで、単一の専門学会ではうまくフィットしないようなテーマでも、何とはなしにうまく板の上に乗せて議論されたという点もありましたが、一方では交通とか安全の核心をズバリと突いた議論がなかなかしにくくて、その周囲を回っていたという感じがなきにしもあらずであったと思います。この間の第8回国内シンポジウムで「交

通の安全を考える」というテーマを選んだのも、やはりこれまでは少し周囲を回っていたかなという感じがあって、ひとつ核心を突いた問題を扱ってもいいという意見が出てきたためです。そして、やってみますと、こうした現実に密着した問題でも、予想以上に意見が出され、議論がかみ合うようになったわけです。これは、この10年近くもこの学会で一緒に活動してきた中でのひとつの成果だという感じを受けました。

次に、研究調査部会についてですが、一番印象深い研究プロジェクトは「数寄屋橋交差点の研究」だったと思います。印象に残った第1の点は、研究成果のいくつかの提案が行政的に受け入れられ、さらにそのアフター・スタディをしたということで、研究が非常に長く尾をひいたことです。もうひとつは、これは、「暴走族の研究」と並んで、この学会が発足して最初に皆がとりかかったプロジェクトで、いろいろな分野の人が、それなりのバックグラウンドを持って集まったわけですが、それぞれの研究の対象を「餅は餅屋」にしなかったことです。小豆屋が餅屋のまねをしているようなもので、その専門の人が私のやっていることを見れば、何をバカなことをしていると思ったでしょうし、逆に、私の専門をほかの人がやっているのを見て、こんな幼稚なことを今さらやってみようのかということがありました。それでも研究をまとめて、いくつかの提案ができたことに、非常に意義があったと思います。

こうした初期の研究活動から思えば、最近では異分野の人々がひとつのテーマにかかって、それなりにほかではできないような取り組み方をし、それを咀嚼して、成果を上げていく——そういった作業のすすめ方が随分とうまくなったように感じます。これはやはり、長い間一緒にお付き合いをして、悪口の言い合いをしているうちに、それぞれの考え方や人となり分かってきて、以前のようにその方の言っていることが理解不可能で困ったということがなくなったためだと思います。今は、発言される前に、大体の言わんとしていることが分かるわけで、このことが学際研究にとって非常に大事なことなのです。そういう意味で、この学会はシンポジウムとか研究プロジェクトだけでなく、月例懇談会とか忘年会とか、何かあるごとに気楽な集まりを開いて会員同士の交流を図っていく——このポリシーが学際研究に生きているように思います。



越 正毅氏

2. 具体的成果のあがる学際研究を

新谷 会員同士の気心が知れあうことによって、学際研究がスムーズにいくようになったということは確かにこの数年、感じられることです。しかし、気心が知れあうということは、多少悪くいえばマンネリになってきたのかもしれないわけです。そういう意味で、この学会の学際研究を新しい視点から、もう一回考え直してみることも必要だと思います。そこで学会に入って1年あまりの新しい会員の3人の方から、今の報告にからんだことでも結構ですし、あるいは学会に入ってみての感想や、感じた問題などをそれぞれに話していただき、その後に討論したいと思います。

稲村 学際的研究については必ずしもここが初めてではなく、二、三小さいものですが、経験があります。そのひとつは、「文化摩擦」についての文部省の特定研究で、政治、経済、社会、心理、医学、農業など、ありとあらゆる文化摩擦に関連のある人が全国から集められていました。ただ、お互いの接触は年に1回の全体総会くらいしかなく、あとは学際といっても、いわゆるマルチ・ディシプリナリー(多学的)でした。自分が担当するテーマを文部省に申請して、各自研究し、それを総会で発表し、討論するのですが、それも分科会に分かれていて、なるべ



稲村 博氏



森地 茂氏

く似たような分野の人が話し合うというものでした。ですから、これはどちらかといえば多学的な研究だったと思います。

もうひとつの経験は、筑波大で「国際価値会議」をここ数年やっています。これは、未来の価値を見出すことがテーマで、非常に広範囲な分野の方々が集まっています。さらにひとつは、私が今いる筑波大が「開かれた大学」ということで、内側にも外側にも開こうという主旨ですが、内側に開くというのは学部とか講座などの壁を取り払って、学際的にやっていくことを建前としています。ですから、毎年予算配分もプロジェクトを申請してつくっていくわけで、私はしばらくの間、「自然と人間」というプロジェクトで研究をしていました。

このように、いくつかの学際的な経験をしてきましたが、この学会はそうしたものとまた違った、かなり独特のものがあるような気がします。その独特という意味は、私自身の主観でいえば、まず非常に温かくて、なごやかで、あとから会員になったのに少しも孤立感がありません。従来、学会というもので味わっていたどこかピリピリしたり、せちがらかったりするものとは違う要素があって、特に私なんか、日頃からあわただしくてストレスばかりたまるものですから、この学会に来るとホッとするというか、オアシスのような感じを受けます。

また研究活動については、私は「空間とモビリティ」のプロジェクトに入り、いろいろと討論していますが、そこで感じることは、最近、自分の専門がだんだん狭くなってきて、自分でも息苦しさのようなものを感じるようになってきている立場からしますと、非常に心が開かれ、自由な発想が楽しめるわけです。つまり、専門外のいろいろなことに接するとともに、自分の専門性にはあまりとらわれなくて、むしろ、そこからいったん離れるような発想の転換が要請される場に置かれることが、非常に斬新で、

常にレビューされるような思いをしています。このあたりが私としては非常にありがたいわけです。

森地 私は2年前に入りましたが、すぐに内部研究調査報告会がありまして、その席で「何で10年も前にやっていた研究を、またここでおやりになっているのか」と質問したのですが、しばらく見てみると、ここではそうした議論をすることはいけないのではないかと、ややとまどったことを今も覚えています。最近では、そうしたとまどいがなくなったのですが、その理由が、宮川さん、越さんの報告を聞いて、非常によく分かりました。私が入ったときは、すでに学会としての体制ができていたものと思い込んでいましたから、当然、学際というからにはあるテーマの下に、いろいろな側面から攻めていって、単独でやっているのとは全く違うユニークな研究成果が次々と出てきている、というイメージがあったわけです。しかし、これは先ほどの報告にもあったように、学会が発足して、その特色として学際性を掲げたものの、学際性を具体的に生かした研究成果をあげていくための体制づくりという部分がまだあって、いまだ胎動期であったということが、どうも理解しきれなかったためだと分かりました。

入会して2年ほど会合に出たりするうちに、最近では全くそうしたイライラを感じなくなって、むしろ感銘を受けることがあります。それは、研究テーマそのものよりも、そこに出てきているいろいろな人が、私とは全く違った発想をしたり、発言をするのを聞いて、なるほど、そういう人もいるのか、私とその存在さえ知らなかった分野があるのかといった、未知のものと出会う楽しさといったものです。ただ、まだ少しせつかけでして、できることならいつの日にか、単独ではできないテーマ設定がされて、成果がどんどんあがってくるような、もう少し研究としての密度があがるような場にぜひ参加し、勉強させてほしいと思っています。

越さんの報告にあった、問題が具体的にないとか、核心をつけないとか、みなさんが興味をもつテーマがなかなか見つからないといった話は、私もかつて経験しています。東京工大に社会工学科ができたときに、私は大学を卒業して数年後にそこにポッと放り込まれました。そこには、経済学、社会学、教育学、さらには都市計画とか土木といった諸分野が混在し、非常にとまどいました。朝から晩までみんなが集まっては、社会工学とは何か、われわれが共通してやることは何かといったことを、2～3年

も聞かされてへきえきした覚えがあります。もっとも最初の1年間は楽しかったのですが……。いつも話が堂々めぐりをしていて、次のステップに行けないというイライラ感がありました。それが今や10数年たってみますと、それぞれ定着して、やはり単独でやるのとは全く違う新しい学科構成ができて、土木とも建築とも違う新しい学生を輩出しています。これを見ると、学際研究については、そうせつかちになってはいけないうかな、という印象をうけています。

井口 私もこの学会が学際的であることに、あまり違和感を覚えていません。それは、20年ほど前から日本人間工学会の理事を続けていまして、そこには工学関係から心理、生理、医学、デザインなど、要するに人間に関係のないものはないわけですから、ありとあらゆる人々が入っていて、そこでお付き合いした経験があるためかもしれません。確かに日本人間工学会に入った当初は、専門が違えば言葉も考え方も違うということで、たいへん刺激を受けました。しかし、それに慣れてしまうと、刺激が弱くなりますし、学際的とはあまり意味がないような感じがしてくることもあるのです。ですから、この学会の主旨が、専門の違う人たちが集まって、互いに違った考え方があることを知り、互いに刺激しあうことが主たる目的というのであれば、すでに十分に目的を達していると思います。

ただし、学際研究としての研究活動をやるとすれば、やはり具体的なものを取り上げ、それを軸にしていけないとうまくいかないような気がします。私はハードウェアの開発が専門ですから、いつまでに何をつくるということで始めるわけです。ですから、成功、失敗は別として、その期限にはひとつのはっきりした成果が出てきます。そういった形で、どんどん具体的な活動をするこゝにすれば、私は学際であろうがなかろうが変わらないような気がします。といいますのは、私と同じ機械工学の専門家でも、ちょっと分野が変わると言葉も、考え方も違います。この違いは、結局は文学とか、心理学と違うということと、違っているという意味ではほとんど変わらないのです。ですから、具体的な活動に入れば、学際だろうとなかろうと、私は関係ないと思います。それは組織とか人の問題です。この学会が何をめざしているのか、私はまだよく理解していませんが、稲村さんが指摘されたように非常に温かい環境にあるということは、何よりも感じています。



井口雅一氏

3. 学際研究と専門性のあり方

新谷 森地さんの、今さらこんな研究をするのかという話は、私にも覚えがあります。それは数寄屋橋交差点の研究のときでした。私もこの学会に推薦されて入ったのですが、最初は忙しくてほとんど出られなかったのです。そのうち、数寄屋橋交差点のフィルムができたから、とにかく見に来いということで、フィルムを見に行き、初めてスクランブル交差点の研究をしていることが分かったわけです。スクランブルなら、私は昭和33年頃に一応研究したことがあり、その経験から考えると、数寄屋橋交差点はスクランブル方式を適用するには大きすぎることもあって、今さら何でこんなことをするのだろうと思いました。しかし、すでに15年前に自分がやった研究にもう一回引き戻されて、当時の古い文献ではこのように言っていますという話をすると、みなさんははア、はアと聴いている。そのときは、学際研究とは何とまどろこしいものだと感じたのが率直なところでした。ですから、われわれもそうだったように、新しい会員の方にとっては、学際研究とは、それぞれが違う言葉を持ち、違う考え方を述べ、それを我慢して聴いて、じっくり理解することだという体験を、共通してもらったのではないかと思います。

宮川 今の3人のお話を聞いて、ひとつ感じたことがあります。第6回の国内シンポジウムを京都で開いた帰りに、私はたまたま参加できなかったのですが、鈴鹿で1泊して、集まった会員がいくつかの分科会に分かれて会合したわけです。そのときに、当学会は何をすべきなのかという議論が巻き起こったそうです。せつかくこうして学際的に集まっているのだから、MORFIプロジェクト、すなわちミッション・オリエンティッド・リフレクティブ・プロジェクト・ファインディング・コミットティという長い名前のプロジェクトをつくって、ミッション、つ

まり目的をはっきり定め、交通という問題のフレームを決めて、もう少しシステムティックに調査研究をやったらどうか、という話が出たことを覚えています。

先ほども森地さんからお話があったように、学際というからには、何か一つのを決めて、はっきりとした目標を定めプロジェクトをやるべきだという考え方も、確かにあると思います。しかし、せっかくこうしたいい環境で、これだけ学際的な人が集まったときに、個別の縦割りの学会がやっているものを当学会がそのまま取り扱っても意味がないし、プロジェクトにしても、自動車とか道路の研究といった個別の問題で、すでに官庁や研究所で扱っているものを当学会が取り上げても、どうかなという感じがします。ですから、研究活動やシンポジウムのテーマを決める場合に、こういう恵まれた環境をどのように生かしていくのが一番いいのか、3年か4年に1回くらいは大いに議論する機会を設ける必要があると思います。ただ、あまり窮屈に考えると、温かみがあるというこの学会のよさを殺してしまうのではないかと、そんなことを思いました。

越 これからの問題点としてですが、研究に参加する人々のインセンティブをいかに保てるか、あるいは刺激できるか、そこが難しいと思っています。この学会は確かに温かみがあって、何となく気持ちがなごんで一杯飲みながら話ができるし、個人的に面白いと感じるところがあります。しかし、この学会でかなり力を入れて研究をし、それを自分の学問上の成果にしようというところまでは、みなさんもまだいっていないという気がします。しかし、本当はそこまでいかないと、世の中に問うたときに「なるほど」という成果が出てこないのではないのでしょうか。

これからはそのあたりが、この学会の学際研究の課題かなと思っています。それには、そうしたテーマに恵まれなければいけないということもありますが、ただそれだけでもなさそうです。例えば、その成果が学際的であればあるほど、その中で自分が果たした役割りが、自分の学問的成果としてどれほど世に問えるかということがあります。また、どういう機関誌に発表するのもかも問題です。自分の学問的成果として主張しようとすれば、専門の人たちが読んでくれるものでないと、いくら学際的といっても認められません。逆に例えば、この『IATSS Review』に成果を発表しても、読んで分かる人は非

常に少ないと思います。

新谷 確かに、学際性ということで、いろいろと幅広い形で、しかも多くの領域の人たちにも分かる形で研究を進めているため、その中でなおかつ専門性を深めていくということはなかなか難しいし、もし、成果があがっても、それをどこに発表するか、悩むところだと思います。専門的に深いほうは専門誌ですべてやっているわけですし、そのあたりで、学際研究をどういう目標でやるのか、あるいはどうやって高めるのかが問われてくると思います。

越 私の乏しい学際研究の経験から感じるのは、メンバーの1人か2人は自分の分野の学問的業績として非常に意味のある、核心をついた研究ができると思います。しかし、その他の人たちは自分の専門分野の蓄積の応用ではあるが、それをとりたてて学問的業績であると他人様に言って、自慢の種になるものではなくて、サポート役に回ることが普通なのではないでしょうか。つまり、主役になった1人か2人はインセンティブがあるが、ほかの人はサポート役に甘んじなければならない。しかも、これはうまくいった場合です。まずいくと、みんながサポート役で、お互いの専門知識を適当に応用することで終わってしまう。そうしたことを考えると、今後の学際研究はいうべくして難しいのではないのでしょうか。

4. 学際研究における2面性

稲村 プロジェクトで研究をする場合、大きく分けて2つの面を目指してはどうかと思います。ひとつは先ほどから言われているように、必ず学問的成果になって出てくることを目指すわけです。これは、いろいろな領域の人がお互いに協力し、単独ではできない具体的なプロジェクトを設定し、計画的に成果が出てくるようなアプローチをすることです。もうひとつは、もっと巨視的な大テーマで、すぐ結果は出ないかもしれないが、来たるべき情報化社会に予測されるようなことを見越して、今のうちから計画しておくとか、あるいは発想の転換をして、もっと巨視的なアプローチをすることです。この両面に分けて、それぞれの好むところや、この学会に期待するものの違いもあるでしょうから、それによって各人がどちらに入るか決めるわけです。すべてをこの2つに分けなくてもいいかもしれませんが、この2つの面を意図的に持たせることにしておけば、それぞれの意味において成果があがるという気がします。そして、先ほどから出ている学問とは別の、人

間的触れ合いとか、温かさは残していただければ、ほかにはないようなユニークな学会になり得ると思います。

新谷 これまでの研究プロジェクトでも、稲村さんのいわれた2面性があったのではないのでしょうか。

宮川 全般的にあって、プロジェクトの半分ぐらいは「動的な環境における視覚的特性」のように、かなり具体的テーマです。一方、「社会的速度と精神的疾患」とか「交通と通信の代替性」といったように、ややミッション・オリエンティッドではないのが1/3ぐらいではないでしょうか。

稲村 具体的なテーマの研究は、その期間中に目的の成果をおさめているのでしょうか。

越 必ずしもそうばかりではありませんが、一応の成果をあげて終えていると思います。長期的視点で議論でもしておこうといったテーマのものは、きちんとまとまりのついた議論にならなかったものもあるようです。

新谷 この5月の国内シンポジウムでも出た話ですが、この学会の名称の「交通安全学会」は、英語ではTraffic and Safety Sciencesと言います。研究テーマをよく見ると、ミッション・オリエンティッドのほうは交通安全に属するものが割と多い。そうではない交通科学の面は、広範な将来の研究テーマを模索する、将来の課題をつかまえるといった形が多いように感じます。

宮川 確かに課題のはっきりしているミッション・オリエンティッドのほうは、インプットとアウトプットの関係ですから、ある程度の数でもやり方次第でかなり評価される成果があがると思います。そうではなくて、交通の問題をどのような座標軸や問題意識で取り上げていくかが主体である研究は、その議論の過程で、異なる学問分野で蓄積されたものを投げ込みつつ、将来を展望した問題を考えていくのですから、どうも結果がはっきり出てきません。ですから、やっている本人は結構満足しているが、報告書を見ると結果がはっきりしていないという批判があるのだと思います。やっている本人の評価と、プリントされたものだけを見る人の評価とが違っているのかもしれない。

稲村 巨視的、長期的なテーマのものは、そう簡単に結果は出ないでしょう。つまり、車の両輪の片方で具体的な成果が学際的に出ているのであれば、もう片方は長期的で、より本質的なものですから、結果はすぐには出ないか、あるいは見えない成果があ

がっているとすればいいと思います。ただし、どっちつかずのテーマになって、成果もどっちつかずになってしまうとまずいのではないのでしょうか。

越 長期的、哲学的な議論は得てしてサロンなんです。具体的なアウトプットは求めないし、期限もないと言えない。サロンそのものはいいと思いますが、そうしますと、ここへ来ておしゃべりするのが楽しいという人だけが来る。しかも一生懸命話したからといって、学問的成果になるわけではありません。一方、繰り返しになりますが、ミッション・オリエンティッドのほうは、確かにアウトプットが決めてあるからやることはやります。しかし、必ずしもメンバー全員にとって、何らかのメリットを持つわけではないというのが、今までの状態ではないかと思っています。

宮川 交通の問題を、単に個別の学会でそれぞれ議論しているだけでは、もはや本質的な問題解決ができなくなり、学際的な取り組み方が必要になってきたということで、当学会が設立されたのだと思います。ですから、やっている人が満足していればいいというだけではだめなのであって、自分なりに納得のできる客観的な評価が必要です。インセンティブといわれるのは、そういう意味だと思います。

越 間接的インセンティブというか、いろいろな分野の人と話し合っ、学ぶところは随分あります。ただ、個別のプロジェクトに対して、自分が一生懸命にやらなければならない理由が特にないわけです。

森地 インセンティブということから出発すると、研究成果なり、何らかの活動が個人にフィードバックされて満足を得るという点がひとつあります。もうひとつ、研究成果が大きな意味での社会に蓄積されていって、確かに前進しているところで満足を得る、あるいはそのことに自分が参加しているという事実で満足を得ることがあると思います。私自身でいえば、3回ほどシンポジウムに参加しましたが、そこでのさまざまな議論が自らの能力のなさのためか、整理して蓄積するには、余りにも次元が違うように見える。そのため、議論を自分で整理することにはやや怠惰になって、自分も一緒になって楽しみながら議論に参加して終わってしまいがちでした。ほかの人にも、楽しかったが、どこか欲求不満になった人がいると思うのです。もう少し議論がきちんと蓄積されることが可能ではないのでしょうか。学会とは本来、自然発生的に出てきて、参加している人間が何かやりたいといって集まってくるものだ

とすれば、この学会はまだそこに行き着く前の準備期間にあるように感じます。

新谷 平尾収さん(当学会顧問)がかつて学際論争に対するコメントとして、学際的研究をきちんとやっていくためには、研究目的に向かって自分が学際的な形で他の分野までこなしていかななくてはならないと話しておられます。またそれと反対に、そんなにすべてできるかという話もあります。そういったことを考えると、プロジェクトに対しては、必要な分野を自分でやると同時に、ほかの人と協力して情報を集めて統合化していくことが必要で、やはりサロンだけの場ではどうしようもないと思います。自分なりに構築していかないと、この学会にいる意義がないだろうし、さらにその成果を示そうとすると、もうひとつ統合化した形で作文し、発表しなければなりません。そうした労苦が、学際研究にあると思います。

井口 私は普通の学際学会の役割はサロンと情報交換だと思っています。この学会はそのほかに、異なった専門の人が集まってプロジェクト研究をするわけです。そうしますと、ミッション・オリエンティッドという研究の中で、越さんが言われたように、それぞれが自分の専門を生かせるテーマを選ぶというのは非常に難しいし、不可能に近いのではないのでしょうか。その点で、これまでのプロジェクトを見ると、信じられないくらい多くの人数が参加しています。直接の実施メンバーは数人でいいのではないですか。あとはそこに参加して、勉強したいという人が間接メンバーとして参加する。その場合は、自分の専門学会に発表できるようなものではなくても、その人にとってプラスになるものが何かあればよい。また、インセンティブという意味からすれば、テーマが社会的に実現するようなものであれば、専門の違う人でもかなりインセンティブを感じると思います。そういうテーマをどのように探してくるかが問題になるでしょう。

越 私は、全員の成果になり得るような研究テーマでなくてはいけないといったわけではなく、それは非常に難しく、事実上は無理だということを前提にして、この学会の場で、やりごたえがあり、しかもほかから見ても見ごたえのある学際研究をやるにはどうすべきか、という視点から話したわけです。井口さんの言われたように、社会的にインパクトの大きい、実現性の高い研究であれば、多少は縁の下の力持ち的な役割をもたされても、やる気を起こす

ことは十分にあり得ますね。

5. 学際研究の活性化を求めて

森地 昔からある学会、例えば土木学会が、世間が土木学会のテリトリーだと認めているところで、国際的に見て遅れてしまったり、あるいは社会的に摩擦を起こしたときには、かなり責任を感じるわけです。集団としての責任もあるし、社会的にも責任をとる。この学会では、そうした意味のテリトリーを認識する必要性はあるのでしょうか。つまりもし「交通安全」ということが重要な核だとすれば、発足してから交通安全上いろいろな問題が起こっているし、近い未来に起こるであろう問題も予見できるはずですから、そうした問題を放置しておいていいのでしょうか。それとも放置して、後世の人たちから「あの人たちは何をしていたのだ」と言われることに対して、ある種の後ろめたさを感じるとすれば、そうした観点からテーマの見つけ方、活動の仕方もあるのかなと思います。

宮川 この学会の会員は、個別の学会でやっているようなことを、この学会に持ち込まないで活動していますね。ディスカッションするときは自分の専門を出してきますが、研究テーマとして自分はこれをやりたいという形では、学際性を標榜しているのとは逆に、この学会に遠慮して持ち込まない面があります。それがあ意味ではフラストレーションになっているのかもしれませんが、それは、自分の仕事をここではやれないということではなく、何かの形でこの学会に寄与したいと思っても、学際性という枠の中で、誰が見ても学際的な研究であり、しかも直接的な成果の出せるものはなかなか見つけにくいということもあるかと思います。しかし、学際性の間接的成果というのは、私がサロンの研究をやっているから自己弁護するわけではありませんが、サロンの研究に出ていると思います。ただ、こういう具合に役立っているということが、サロンの研究の場合は言いにくいのでありまして、その点がフラストレーションと言えるかもしれません。

森地さんのいわれた責任については、この学会はある意味では義務はありません。まして、自分の専門学会では変なことをいったり、間違った論文を発表することは非常に恥ずかしいが、この学会では別に何でもない……(笑)。そういう点がこの気楽なところで、それでいいのかなということはいつも気にかかっていますが……(笑)。ひとつの案として、

もう一度「数寄屋橋交差点の研究」の発想に戻って、越さんあたりに「これをやれ」と言っていたが、2つくらいのグループをつくって、どういう取り組み方をするか考えていくのも新しいやり方かもしれません。

稲村 学会10年の歴史で、本質的なテーマがあり、巨視的な成果をあげている一方で、数寄屋橋交差点のように、具体的な成果があがっているものもいくつかないと、まずいのではないのでしょうか。

宮川 しかし、まずいというのは、つまりは自分に対してまずいと思っているだけなんですよ。

稲村 私は最初に、この学会の良い面を話しましたが、一部には、井口さんや森地さんがいわれたのと似た気持ちもあります。それは、せっかく入ったからには、具体的な成果のあがるテーマに自分が入り込んでいきたいというときに、これでいいのだろうかという気分があるわけです。その気分がまずいと言わせるものだと思いますね。

宮川 私も、学会の研究や活動がこれでいいのかと常に感じていますし、何のために参加しているのか、自分自身に問いかけています。そうした問いかけはどなたも持っていますので、設立10年というのはひとつの機会ですから、もう一度学際論争を起こすべきなのかもしれません。その場合、論争はWhy、What、Howという形でなくてもいいと思います。

森地 私がいま参加しているプロジェクトでは、いろいろな分野の方がいて面白いし、議論もできます。そして、参加意識もあります。ですから、個々のプロジェクト単位では、そう難しいことを言わなくてもすぐできると思います。あとはそこに参加した人が、どのくらい寄与するかだけの話です。越さんがいわれたように、いいテーマ設定と一生懸命やる人が2、3人いれば、容易にプロジェクトで成果をあげられるでしょうから、学会の体質とか存立の有無などをうんぬんするほど大きな議論をしなくても、参加意識は生み出せると思うのです。

越 みなさんの意見を聴いていますと、1人の会員が、哲学論争的、サロンのようなカテゴリーのプロジェクトと、異なった分野の人たちの共同作業によって決められた時間までにアウトプットしなければならないというカテゴリーのプロジェクトの、それぞれひとつずつに属せば、かなりアクティブにやれるかもしれないという気がします。

新谷 つまり、微妙なところで他の分野の人たちと議論しながら、とにかく物事を具体的につくり上げ

ていく研究と、長期的な視野に立って、学際的なアプローチを議論するようなサロンのような研究という両面にコミットしていかないと、この学会に来ている意味がないということですね。いずれにしても、この学会が設立された初期において議論してきたことを、新しいメンバーを加えて討論し、問い直していくことがないと、何となく惰性に流されてしまう感じがします。時間もたちましたので、最後に言い残したことがあればうかがって終りたいと思います。

稲村 私は医学のうちの臨床と社会科学的な面の接点みたいなことをしていますが、本質的には臨床科で、プラクティスなことばかりやっているせいか、この学会のオアシス的な面をありがたいと感じるし、そういうものはぜひ残していただきたいと思います。しかし他方では、せっかく参加したのだから、みなさんと一緒に、具仕的な面でも、巨視的な面でも成果の上がるようなことをやりたいという気持ちがあります。これまでの個々のプロジェクトにはそれなりの成果があると思いますが、学会全体として見たときには、10年という単位で、何らかの目に見えるような蓄積をあげる方向が必要だと感じています。

森地 アウトプットの出し方を工夫してみたらどうでしょうか。普通の学会ではなかなか出ないような提言をしてみるとか、シンポジウムは必ずしも内部の研究ではなく、外部の研究をネタにして討論してみるとか、あるいはサロンで議論したことを上手な人にまとめてもらう、といったアウトプットの整理をうまくすると、自分たちの研究もかなりあがると感じるのではないのでしょうか。

越 私は現在、シンポジウムの担当ですので、森地さんの提案は面白いと思います。サロンのようなグループのいろいろな議論の中間報告的なものを月例懇談会などで発表し、それについて議論するということはぜひ実現したいものです。

宮川 現在の国際シンポジウムと国内シンポジウムは1年おきに交互に行い、春には研究調査報告会が開かれます。事務局の努力で段取りはスムーズに運んでいるわけです。しかし、そのやり方を考え直すとか、取り組み方を変えるとか、新しい方策を取り入れる時期ではないかと思っています。

新谷 学際研究をめぐる本日の議論を、今後のシンポジウム、研究プロジェクト活動の中にうまく取り入れていただければと思います。どうもありがとうございました。